

高句麗における仏塔の受容と展開について

——文化的背景を中心に——

金 春 鎬

I. 問題の所在

高句麗の仏塔を考えると、真っ先に台頭する問題は、高句麗最初の仏塔をどこに求めることができるのかである。そして、一塔三金堂式の伽藍配置に塔が配置されることや塔の平面が八角であることなど、著しい特徴を見せている高句麗の仏塔について、そのような特徴を生み出した高句麗の文化的背景にはどのようなものがあったのかの問題もまた大きい。本稿ではこれらの問題に関する幾つかの端緒を提示しながら筆者の考えを述べることにする。

II. 高句麗最初の仏塔

高句麗最初の仏塔をどこに求めばいいのだろうか。この疑問の答えへの最も有力な手がかりは、小獸林王五年（375）二月に建てたとする肖門寺と伊弗蘭寺に仏塔があったのかを考えることであろう。しかし、肖門寺と伊弗蘭寺については、その位置さえもはっきり分かっていない状況であり、そこに仏塔があったのかの問題を明確にするには今のところ限界を認めざるを得ない。しかし、幾つかの端緒はある。

まず、肖門寺・伊弗蘭寺を建立したのは小獸林王五年（375）二月であり、秦の符堅王が順道と仏像・経文を送ってきた年が小獸林王二年（372）六月であった。つまり、高句麗では仏教の初伝から2年8月後に最初の寺院が建立されたことになる。この2年8月こそが肖門寺と伊弗蘭寺の工事期間であったと思われる。もちろん仏塔や金堂、講堂、僧房などの伽藍をすべて備えた寺院の建立時期としては少し短い感もあるが、肖門寺と伊弗蘭寺の場合、王命による国家事業としての建立であったはずであるから、2年8月という工期内に寺院を竣工することは、決して無理とはいえない。

次に、肖門寺・伊弗蘭寺ができる前にすでに順道と阿道が高句麗に来ていた。

これは彼らが持っていた中国寺院に関する情報を生かして肖門寺や伊弗蘭寺の工事に参加、あるいは彼らの情報が十分反映された可能性を意味する。

村田治郎の研究(「中国の初期伽藍配置」, 1966)によれば、高句麗に仏塔が公伝された4世紀ころに中国においてすでに定着していた伽藍配置は、一塔回廊式、一殿回廊式、一塔三金堂式であり、一塔一金堂式が新しく登場して定着しつつあったという。つまり、肖門寺と伊弗蘭寺も当時中国に定着していたこのような伽藍配置が採用された可能性が極めて高い。それに、当時中国に定着していた伽藍配置の殆どが仏塔を中心としており、また現在発掘調査された高句麗寺院の殆どが仏塔を中心とする伽藍であることを考えると、肖門寺と伊弗蘭寺にも伽藍の中心として仏塔が存在した可能性が高いと思われる。

このように、高句麗最初の寺院である肖門寺・伊弗蘭寺は王命による国家事業として建立された寺院であり、順道や阿道が持っていた当時中国の寺院に関する情報が反映されていたと想定され、そこには塔が存在していた可能性が高いと推測され、高句麗は最初の寺院建立の段階から中国式の仏塔が受容され、建てられたと推測できる。

Ⅲ. 高句麗仏塔の特徴とその背景

1. 八角平面

高句麗仏塔の著しい特徴としてまず注目すべきところは、平面形式を八角にしていることである。ここで問題となるところは、このような八角仏塔が定着した背景にはどのようなものがあつたのかである。この高句麗の八角塔の思想的背景としてすでに指摘されているのが、中国の道教思想と仏教の『四分律』の造塔思想である。(李興範「高句麗時代定陵寺伽藍の構造と思想基盤」, 2002 など) 筆者はこれに加えて、八角仏塔が高句麗に定着した背景として八角と関連する高句麗の文化的要素に注目したい。

その事例として挙げられるのがまず、高句麗古墳の中には天井を八角形に仕上っているものが多く存在することである。たとえば、高句麗の古都であつた国内城周辺地域(現在の中国集安縣通溝)にある舞踊塚(5C前半)の場合、八角の直径を少しずつ減らしながら最上部まで六段重ねている天井形式をとっている。この舞踊塚のすぐ隣に位置しながらほぼ同年代のものとされる角抵塚の天井の様子もまた舞踊塚とほぼ同じく八角形の形式をなしている。この他にも八角形の天井形式をなしている高句麗古墳は、天王地神塚(5C中葉)、大安里一号墳(5C後半)、

徳和里一号墳（5C 末～6C 初）、徳和里二号墳（5C 末～6C 初）がある。

また、高句麗古墳の中に八角塔と関連して注目されるのが、八角の柱が用いられていることである。その事例として挙げられるところは、安岳 3 号墳（357）、台城里 1 号墳（4C 末）、寮東城塚（4C 末～5C 初）、双楹塚（5C 末）などである。その中で南浦龍岡郡龍岡里にある双楹塚の場合、南向きの〈呂〉字形の二室墳であるが、前室と玄室の間の通路両側に八角の柱を二本立てており、それには蟠龍が描かれている。また、安岳 3 号墳にも玄室などに八角の柱が数本使われている。そして、通溝地域の千秋塚の周辺や集安付近の遺蹟、平壤の浮碧楼からは八角形の柱座をしている礎石が発見されており、古墳以外の建物にも八角柱が使われていたことがわかる。

もう一つ、高句麗の八角仏塔と関連して注目される高句麗古墳壁画がある。それは、集安地域の五盔墳四号墓に描かれた壁画の一場面である。それはこの古墳の玄室北壁面の左側には、蓮華の中に僧侶のように剃髪している人物が、火炎文の連座に座り、左手に棒を持って連座の右側に描かれている八卦を指しながら思索に深けている姿が描かれている。

このように、仏塔以外にも高句麗古墳と関連して八角形の要素が数多く用いられていることが分かる。これは、高句麗の八角仏塔が、元々高句麗に根付いていた八角に関連する文化的要素を背景にしていることを意味するものであり、その具体像を明確にする上で、上記八角形の事例は有効な手がかりであるに違いない。

2. 伽藍配置における仏塔

高句麗における仏塔の展開に見られる著しい特徴として、二つ目に注目されるのは高句麗寺院跡の殆どが八角塔を中央に南には南門を置き、東・西・北に中央の仏塔を面してそれぞれ金堂を配置したいわば一塔三金堂式の伽藍配置を持っていることである。

さて、この高句麗に見られる一塔三金堂式の伽藍配置に関する最も重要な研究上の問題は、その起源をどこに求めることができ、またそれが高句麗に定着した背景にはどのようなものがあるかである。

まず、その起源については上記の村田治郎の研究においても明らかなように、一塔三金堂式は、高句麗に仏教が公伝される前からすでに中国大陆において定着していた伽藍配置であると推測される。そのようになると高句麗においての一塔三金堂式の起源は中国大陆に求めることができることを意味する。

そして、このような一塔三金堂式が高句麗寺院の伽藍配置として定着した重要な背景として、一塔三金堂式伽藍配置と類似した建物配置が高句麗古墳に見られることに注目したい。例えば、安岳 3 号墳 (357 年) や台城里 1 号墳 (4 世紀)、高山洞 7 号墳のような高句麗古墳は、前室を中心としてその北 (奥) に後室、東西の側室を配置した墓室配置を取っており、塔を中心にして北に中金堂を置き、東西に両金堂を配置する一塔三金堂式伽藍配置を思わせる。このような墓室配置が他の地ではあまり見られない高句麗古墳の特徴であると言われており、一塔三金堂式が高句麗に定着した要因を考える上で重要な手がかりになると思われる。

3. 塔心礎のない仏塔

今まで高句麗の仏塔跡から塔心礎が一つも発見されていない。これは通常古代の木造楼格式の仏塔の場合、中央に心柱を置き、それを支える心礎石を設けていることを考えると、非常に異例のことである。

筆者は現時点でこの問題に関する最も可能性の高い仮説として、高句麗の仏塔はもともと塔心礎を必要としなかった構造の仏塔であったとしたい。それは、そのような事例が現存する木造塔に数多く見られるからである。たとえば、韓国全羅南道和順の雙峰寺 (1068 か) の場合が、初層全体が仏堂化されており、心柱が初重の屋根のところから上に走る構造を持っており、地面には心礎がない。また日本にも、広島県明王院五重塔 (1348) や東京都本門寺五重塔 (1607)、兵庫県一乗寺三重塔 (1171)、京都府浄瑠璃寺三重塔 (12c) など、現存する多くの木造仏塔が塔心礎を必要としない構造を持っている。

IV. 結び

以上のように本稿では、高句麗の仏塔の受容と展開というテーマのなかで、高句麗最初の仏塔をどこに求めるのができるかの問題と、高句麗仏塔の特徴とその背景として幾つかの高句麗の文化的要素を挙げて見たが、成果として得られたものは前述の通りである。資料や紙面の関係などから十分な考察ができなかったところが多かったが、筆者に残された研究課題とし、諸方々のご叱正頂ければと思う。

〈キーワード〉 高句麗仏塔、一塔三金堂式、八角平面、高句麗古墳

(佛敎大学大学院)

his disciples and lay Buddhists accordingly. His thoughts mainly developed focusing on reciting the names of Buddha (称名念佛), Buddha Contemplation (観念念佛), and mind of Pure Land (唯心淨土). In particular, he composed the 'Söngwōka' (僧元歌) of Kasa (歌辭), which was written in Korean language expressed in Chinese characters (I du munch'a 吏讀文字) in order for lay people to understand more easily. However, he did not present a kōan method for Buddha Contemplation Sōn (念佛公案法). His Dharma song which begins with "Where is Amita Buddha (阿彌陀佛在何方) —" is always recited in liturgical services and the grand Buddha Contemplation ritual in Korea today, and it is generally recited as a representative Dharma song of Buddha -Contemplation Sōn (念佛禪).

94. On the Thoughts of the *Thousand-armed Avalokiteśvara-Sūtra* Translated by Bhagavaddharma

Ho-sung KIM

It is said that *the Thousand-armed Avalokiteśvara sūtra* translated by Bhagavaddharma could be divided into two parts: 'the original part' and 'the additional part'. The scope of this article is limited to the former, the original part. Although this *sūtra* has been known to belong to esoteric Buddhism, this original part actually shows not only esoteric Buddhist thought but also the Pureland idea and *Daśabhūmi* concepts of the *Avatamsaka sūtra*. These three kinds of Mahāyāna Buddhist thought seem to have been harmonized in this part of the *sūtra*, which influenced strongly the establishment of the 'Recitation Version' of the *Thousand-armed Avalokiteśvara sūtra* created in Korean Buddhism.

95. The Reception and Development of the Pagoda in Koguryō

Choon-ho KIM

When thinking of pagodas in Koguryō, the first question that comes to mind is where the first pagoda can be found. Also, the origin of the charac-

teristics of Koguryō's pagodas is a problem. For example, what is the history of the one pagoda-three image hall pattern (一塔三金堂式) in the composition of Buddhist temple, and what the background of the the octagonal shape of the pagoda? In this paper I emphasize the fact that the cultural background of the characteristics of pagodas in Koguryō can be found in Koguryō's ancient tombs.

96. Several Problems of Quotations from Works of Wōnhyo in Texts Written by the Jōdo Sect Masters in Japan

Jinin FUKUSHI

In his *Senchaku Hongan Nembutsushū*, Hōnen quoted a sentence 「浄土宗意本為凡夫兼為聖人」 from the *Yushin'anrakudo* for the most important reason that it establishes the Jōdo Sect's name. In the days of Hōnen, it was said that Wōnhyo had written the *Yushin'anrakudo*, but actually this is not correct. By this, many masters from the Jōdo Sect wrote 55 writings, using quotations from Wōnhyo. However, the sentence he used from the *Yushin'anrakudo* was also in the *Jingtu-lun* written by Jiakai. The question is, why did Hōnen quote the *Yushin'anrakudo* in the first place for the basis of the Sect's name? That is because Hōnen, who trained in ascetic practices in the Tendai Sect, was under the impression that Wōnhyo belonged to the Kego (Hwaōm) Sect, and also was swayed by Saichō mentioning Wōnhyo giving approval to the teachings of the Tendai Sect. Hōnen only paid attention to the fact of Wōnhyo saying 「浄土宗意本為凡夫兼為聖人」, not considering any difference between positions.

97. Nichiren's Writings

Masahiro KOBAYASHI

In this article, I aimed to detail a classic type of 'kana' which Nichiren used. By studying Nichiren's writing from the viewpoint of *hentaigana*, we can throw fresh light on problems of Nichiren's writings which have long